慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「資本」なる名辞の変遷（上）
Sub Title	
Author	園, 乾治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.10 (1921. 10) ,p.1400(140)- 1407(147)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以上を以て千九百二十一年米國緊急關稅法の大要を説明し終れり、説明の對照に主として獨逸の實例を引用したるは現在米國の生産業の最も恐るゝ競爭者は獨逸にして對獨逸の政策は軈て米國商業政策の根本をなすが故なり。然かり而して獨逸の産業回復は單に米國のみの問題に非ず又日本の問題なり、獨逸國民存在する以上、今後彼等が輸出貿易に全力を傾注するは明白にして、彼等が輸出貿易に全力を傾くる以上勢ひ日本は其激烈なる競爭を豫期せざるべからず。

米國の保護關稅率の上騰に由りては輸入を阻止せられ、獨逸の競爭に由りては販路を縮少せらるるとすれば今後の對米貿易は決して從來の如く容易には非らざる可し。愈々堅實なる産業、眞摯なる貿易政策に非ざれば立つ能はざるの時は來れり。日本貿易業者の自重を切望して止まざるなり。

（完）

「資本」なる名辭の變遷（上）

園　乾　治

これは Edwin Cannan, Early History of the Term Capital. (The Quarterly Journal of Economics. May, 1921 所載）の主要部分の意譯である。

一

Capitalis といふ形容詞は、ローマ人がその名詞 Caput から作り出したものであつて、この言葉は、英語の所謂 head の意味を有つて居るラテン語である。英語では head を形容詞的に用ひ、或ひはハイフンを挿入して head-keepers, head-offices, head-quarters といふ工合に用ひる。然し辭書の記載するところを眞とするならば、古典時代のラテン語の用法では、Capitalis といふ言葉は一般に犯罪と刑罰に用ふる形容詞

Capital 即ち「死刑に處すべき」と同じ意味の場合に限つて用ひられたといふことである。然し時々は、英語に於てはもつとよく知られてゐる「最も重要なる」といふ意味に用ひられることもあつた。さうして後にはこの用ひ方が普通となつて、佛語で "la ville capitale d'um pays" "le point capitale de l'affaire" 英語で "the capital messuage" "the capital city of a country" 及び "the capital merit" of a work. 等といふやうな用ひ方が澤山に行はれるやうになつた。（然し capital letter といふ場合には、以上の如く「最も重要なる」といふ意味はない。却つて本來の「先頭に立つ」といふ意味に用ひられたものである）。この意味に於いては、英語の chief 及びこれと等しく caput の意味を弱くした形である佛語の chef とは全く同義語である。

一つの事業が個人的に經營せらるゝか、又は小數の者の組合になる商會によりて經營せらるゝか、或ひは多數の者の組合である會社によりて經營せらるゝか、その孰れの場合であるを問はず、或る特定の事業に於いて取扱はるゝ主要なる貨幣額は何であるかと云へば、それは即ち事業の基礎をなす貨幣額。個人、商會、會社が取引をなす貨幣の總計を云ふのである。言ふ迄もなくこれは最初には事業を開始したる貨幣額で後にはそれに附け加ふべき額と控除すべき額とが生ずる。さうして幾何を附け加へ、幾何を控除すべきかは、實際問題であつて意見が區々に岐れて來る。且つ一般的な原則も或る程度まで事業の種類により、また同一種類のものにおいても經營の方法によりて相違するのである。かくの如く、如何なる金額を正しい額とするかといふことに就いては、議論があるかも知れないけれどもその本位に就いては、疑問は決して

起らないのである。即ち計算の結果はかゝる金額が過大であるとか、或ひは寡少に失するとか種々の批評があるかも知れない。更らに支配人は否定しても、缺損であると主張せられることさへあるだらう。然し縱令その金額が零であつても、或ひは負數であつても、何故にかゝるものがあるかといふことに疑問を挿むものはない。かくの如き貨幣額は、これを基礎として事業が行はれ、また事業の結果得たるもの――一年とか半年とかの短かい期間の利潤(the profits)――よりもその額が大であるから chief sum と云はれるのである。本來の額と新に得る額との關係は、貸付金とそれに對する利子の關係と同じであつて、かゝる金額を the principal sum 或ひは簡單に principal といふのは、本來のものが優れてゐるからかく呼ぶやうになつたのである。

二

この問題に就いては、私の語學上の智識が十分でないから、積極的に論ずることは出來ない。私のこの問題に就いて、外國語の力を借りやうとした努力は、(Revue d'économie politique 一八九三年五月號、一七八―七九頁) 失敗に終つた。然し私の信ずるところに據れば、現代のラテン語 capitalis に相當するものが、如何なる言葉であらうとも、少くとも十六世紀の中葉には大陸諸國に於いて、事業の主要なる金額を示す名詞として用ひられたものであつた。さうしてかゝる主張に到達するには、Low Latin の言葉の用ひ方が渺からぬ便宜を與へる。Böhm-Bawerk は何等據るべき權威を示すことなくして、capitalis pars debiti は貸付元金を意味すると云つてゐる(Positive Theory of Capital, 一八九一年版、一一四頁)。また Irving Fisher は Du Cange の Glossarium から "capitale dictur bonum omine quod possidetur" 即ち「capital とは所有する財の總稱である」といふのを引用してゐる(Nature of Capital and Income, 一九〇六年版、六二頁)。孰れにしても、かくの如き意味で capital 又は寧ろ capitale なる言葉を最初に用ひたる例を、英語の文獻中に發見するのは、英國商人に外國に行はれてゐる優れたる方法を以て、記帳することを敎ふる書籍に於てである。Professor W. R. Scott は一五六九年、「伊太利商人の會計の方法」("the art of Italian merchants accounts") を書いた James Peele が「財產目錄 (an inventorie for tranfique) を商品の賣賣を行ふ家屋に殘存する、總ての物品を記載したる記錄にして、之れによりて或る人の財產狀態を知り得るものであつて、これに二つの種類がある。その一は現金、債務、商品等總て人が所有し、所有すべかりしものを示し、他の一は彼が債權者に負ふところの債務を記載したものである。さうしてこの兩者を比較すれば、茲に初めて、その財產狀態が明瞭になるのである」。と云ふことを述べて居ると云ふ。(Scott の Constitution and Finance of English, Scottish and Irish Joint Stock Companies 。1720, 第一卷六二頁、一九一二年には詳細な引照がある)。Murray の New English Dictionary, the Oxford Dictionary 又は N. E. D. には一五八八年に出版せられた J. Mellin の Briefe Instr. から「殘餘は所有者の純粹の殘餘物又は capitall である」といふことを述べてゐる。Richard Dafforne は The Merchants Mirrour; or Directions for the perfect ordering and keeping of his accounts 一六三五年版に於いて次の如き記述をなしてゐる。こゝに掲げた例は和蘭の銀貨 guilder で示してある。これによつて見れば彼が外國の

影響を蒙ることが大であつたことが窺はれる。

「第九十六、合資會社の各組合員の醵出する資本は次の如し

Simon Sands の出資 ……gl. 11,400
Richard Rakes の出資……gl. 7,800
gl. 19,200

Oxford Dictionary は Cotgrave の Dictionarie of the French and English Tongue 一六一一年版を引用して、Cotgrave は佛語の Capital は "capital" にあらずして wealth, worth, a man's principall or chiefe substance" であるとしてゐる。かうして彼はその用例として "en argent soit le capital de celny la qui te vent mal. Prov. Let money be thy enemies whole stocke" を擧げてゐる。それ故に當時の英國に於いては、capital なる言葉は餘り使用せられなかつたことを示す消極的證據と見られる。（この點に就いては從來誤つた解釋をしてゐるものがある。cotgrave の譯を掲げたのは、當時一六一一年には英語として capital が用ひ慣れてゐない證據を擧げたものであつた。一六三三年の Cotgrave の辭典には Capitall, capital, capitulaire, a great capitall (or tex) letter, cadeau を英佛の部に示してゐる。Henry Hexham の Copious English and Nether duytch Dictionarie 一六六〇年版は capitael, The Principle or Chief Summe を擧げてゐる。）

III

Cotgrave の Dictionary の出版せられて後三年にして capital といふ言葉は、East India company の記錄に於て株主の出資の名目上の金額を表すものとして、使用し始められたといふことを Professor W. R. Scott が云つてゐる。然し會社は未だ自己の永續的な stock 又は capital を有する時代に至らなかつたので、この株主と云へるのは "company" のそではなくて所謂 "voyage" の株主と云ふべきものである。これ等の "voyage" 中の株主が一株につき五十パーセントに相當する金額を受取る場合には、——一六一四年九月三十日にはその配當は "fifty on the hundred" と稱せられた。然しながら十二月六日には、今であるなら百パーセントの配當といふべき處を "capital in money" と呼んだ。かうして Professor Scott の云ふ處を以てすれば、一六一四年以後には配當は屢々資本（capital）の一倍または數倍といふ言葉で言ひ表はされた。この場合には資本といふ言葉は前に述べた Dafforne から引用した場合と全く同じ様に、株主の應募した資本といふ意味に用ひられてゐるのである。

加之ならず一六二一年には West India company の設立に關する United Provinces の States-General の訓令の英譯に、會社の社員の "capital or stock" 及びその醵出した "capital sum" といふことが述べてある。Professor Scott はこれを以て、新しい言葉が誘入せられたのであると考へる。會社の有するものといふ意味に用ひられたる stock of the company は、借入金で購入したものを包括する。そうして貨幣といふ言葉で言ひ表はされたる時には、會社の全體の stock は株主が醵出したものと、借入たものを加へたものである。それ故に stock に對する fifty on the hundred（または吾々の云ふところに從へば五十パーセント）の配當といふことは、誤解されることがあるかも知れぬ。會社に關聯して用ひられる stock といふ言葉の多くの意味は、何とかして明瞭に意味を定めて置く必要がある。さうしてこの目的のために、capital といふ外國から輸入せられた言葉が用ひられるやうになつたのである。

會社の社員である個人の持分が、貨幣の一定分量である時には、これを彼等の "capitals" と呼ぶ。それからこれ等の持分の總體のものを、"the capital of the company" といふやうになつたのは、僅かな一歩の差である。この一進展は、かゝる總體のものが、會社の活動の基礎となるものであるといふ事實――重要な會社の stock であること――によつて、一層容易に達せられた。さうしてこの間の事情については、一六九七年の英蘭銀行の法令にこれを窺ふことが出來る。第二十項は最初に common 及び principal との間に形容詞 capital を挿入し、會社の the "common" capital, and "principal" stock と云ひ、然る後に同じものをいふ場合に the said capital stock の如くに common 及び principal を省いてゐる。茲に "common" なる言葉は各個人の capitals を總括する意味であり、"principal" は特定の stock の優れたることを示すものである。（原文にはコンマがないから common capital and principal stock に於いて capital といふ言葉は、名詞であると考へられるかも知れない。然しながらこの解釋は capital stock といふ用ひ方によつて排斥せられる。さうして假令その説を認めるとしても、上述の議論には何等の變動は起らない。）

會社の經濟に就いて語る場合に capital と云へば、十七世紀の末葉以後には、二つの意味を有することゝなつたのである。一つの會社が設立せられ、株主が貨幣を用意したる時には、彼等は資本を用意したと云はれる。さうして斯かる貨幣が一度得られるならば、それは會社の "capital stock" 又は簡單に "the capital" となるものであり、利潤が豫期せられ、幾パーセントといふ配當が要求せられるのである。さうしてそれは各社員又は株主の間に、その出資高に應じて按分せられるべきものである。（多くの會社の資本は株式になつてゐること、配當は株式の數に應じて行はれること、等を閑却してゐるのではない。この場合に於いても、實際は「何磅株」といふことが書いてあり、十磅又は一磅の株式の所有者は、十磅または一磅の持分の所有者と全く同樣の地位にあるのである。）

（未完）

新刊紹介

R. Eucken, Sozialismus (Philipp Reklam, U.B.)

レクラム叢書の一部である本書が世に公にせられたのは之れが著者たるオイケン教授が昨年エーナ大學を去りし前後のことであると思ふ、而して獨逸に於ける、理想主義の指導者たる著者が如何に社會主義を考察せしやを明かにするために、勢ひ之れが豫件として彼れが如何なる思想の懷抱者たるやを簡略に叙述する必要があると思ふ、恐らく彼れの哲學思想に於て誰人も承認する處はより高き精神界なるものが彼れの思想の中心をなせる點であると共に之れが研究的方法が經驗的自我に出發せずして大なる精神的綜合即ち生活系統に存することである即ち此内的全體主義の方面から彼れは社會主義其者の